

S O S を伝えたいのに… ～公立志津川病院で～



▲2011（平成 23）年 3 月 12 日 病院の屋上に自衛隊のヘリコプターが降り立ち、患者たちの救助が始まった。

公立志津川病院には 300 人を超える人々が孤立した。かろうじて浸水を免れた新館 5 階の会議室で、入院患者と職員、そして地域住民が、繰り返す津波と余震の恐怖に耐えていた。

津波によって携帯電話のアンテナなどが壊滅したため、電話も不通となった。海岸部の橋も全壊し、陸の孤島となった。

当時の横山孝明事務局長は、非常時用の衛星電話で県内の消防署や県庁に何度も電話したが、話中で全くつながらなかった。そこで、県外に知り合いのいる職員から番号を聞いて、なんとか救助を求めようと電話し続けた。唯一つながったのは、はるか遠方の医師会だった。南三陸町の現状を伝えてくれと依頼したが、頼みの綱の衛星電話も 19 時には充電がなくなって使えなくなってしまった。救助を求める術は、それで完全になくなった。



▲2011（平成 23）年 3 月 18 日撮影の
公立志津川病院周辺。

大災害時に、救援要請をスムーズにするためには、遠方に緊急時のネットワークを築いておくことが大切だ。

救助のヘリコプターが来たのは翌朝。全員の救助が完了したのは被災から 2 日後の 3 月 13 日だった。